

〈名探偵〉からの逸脱

——小栗虫太郎「聖アレキセイ寺院の惨劇」を中心に

松田祥平

一 小栗虫太郎作品に対する新たな解釈の可能性と本稿の射程

従来の小栗虫太郎研究を俯瞰してみると、ある一つの傾向が確認できる。

それは、研究があまりに代表作『黒死館殺人事件』^①に集中し過ぎていくという傾向である。殊に『黒死館殺人事件』以外の初期作品は研究の対象になる機会に乏しく、昭和八年から九年あたりの初期作品で重要なものは、「完全犯罪」(『新青年』一九三三年七月)と『黒死館殺人事件』のみで、「他の「法水もの」は「黒死館」の「脚注」同然でしかない」という松山俊太郎の発言^②などは、如何に『黒死館殺人事件』以外の初期作品が軽視されてきたかを物語っている^③。

この点に関しては、既に「小栗虫太郎論」といえば、多くは『黒死館殺人事件』について語られるのが常であった。だがそろそろ『黒死館』からいったん退館して、他の作品にアプローチすべき時ではないか」という横井司の指摘や、「小栗といえば『黒死館』

という風潮」があるが、それは「まったくの誤りだ」という杉江松恋の指摘^④があり、警鐘が鳴らされてはいるものの、しかし、今なお『黒死館殺人事件』以外の作品研究はそれほどなされていないという現状がある。

そして、そのような研究動向の中での『黒死館殺人事件』論においては必然的に——『黒死館殺人事件』は、探偵法水麟太郎を主人公に据えた一連の作品群、所謂法水シリーズのうちの一作であるにもかかわらず——連作という展^{パリス・スケット・イブ}望が失われてしまう。管見の限り、『黒死館殺人事件』と他の法水シリーズとが比較検討され、有機的に結びつけられて語られたことはほとんどないようだ。だがしかし、同作に対して単独で読解するというだけでなく、シリーズとして読むという視座に立ったとき、初めて見えてくるものもあるのではなからうか。

本稿は、以上のような問題意識に立脚し、小栗虫太郎のキャリア初期における足跡を検討することを目的とする。具体的には、『黒死館殺人事件』以前の法水シリーズを主な対象とし、その中でも特に『新青年』一九三三年一月号に掲載された「聖アレキ

セイ寺院の惨劇」に焦点を当てて、法水の〈推理〉という観点から分析を試みるものである。

二 〈探偵〉相対化という問題系と小栗作品

江戸川乱歩は、探偵小説を「難解な秘密が多かれ少なかれ論理的に徐々に解かれて行く経路の面白さを主眼とする文学である」と定義しているが、であるならば、〈探偵〉とは「難解な秘密」を「論理的に徐々に解」いていく存在だということになる。

周知のように、エドガー・アラン・ポーの「モルグ街の殺人」（一八四一年）は探偵小説の嚆矢というべき作品であるが、同作に登場するC・オーギュスト・デュパンは「想像力と理性という二重の才能によってほとんど神のごとき」人物として描かれている。このような神格化——作中、作外を問わない——は〈探偵〉においては避けがたい。たとえ謎の解明や真実への到達という〈探偵〉の機能に対して、デュパンほどに忠実でなかったとしても、〈探偵〉という存在は、基本的には神格化されることとなるだろう。コナン・ドイルが創造した探偵、「デュパンが自然に発展した探偵」であるところのシャーロック・ホームズは、正にその典型例である。ホームズは「黄色い顔」（一八九三年）に見られるように、時には誤謬を犯すこともある。しかし無謬の存在ではないとしても、彼は明らかに真実の解明者——〈名探偵〉として神格化されているのである。

日本探偵小説の隆盛は乱歩の登場を契機とするというのも、今や常識の範疇に属する見解かと思われるが、彼のデビュー作「二

銭銅貨」（『新青年』一九二三年四月）が、そのような〈探偵〉の機能自体を相対化する作品であったという事実は、大いに注目に値する。結末部において、同作の興味の中心となっていた大金の隠し場所が記されているはずの暗号文は、実は私の悪戯により作られたものだったという事実が明かされるのであるが、ここで探偵役に当たる松村武の一見合理的な推理は、「ゴジヤウダン」の一言で見事に無効化されてしまうのである。また、「二銭銅貨」と同時期に書き上がったという「一枚の切符」（『新青年』一九二三年七月）では、探偵左右田は、夫人殺害の容疑をかけられた博士の無実を、事件現場から拾ったという「一枚の切符」をもとに証明するのだが、結末において、自身が「誠しやかに並べ立てた証拠」は「悉く、さうでない他の場合をも想像することが出来る様な、曖昧なもの」でしかないことを明かし、さらには肝心の切符も、出処を偽っていたとしたらどうだと述べて「意味ありげにニヤリと」笑い、推理を捏造した可能性すら匂わせている。

『新青年』夏期増刊号（一九二八年八月五日）から一〇月号まで連載された「陰獣」は、乱歩における同種の趣向を持った作の代表だといえるが、かように乱歩は「厳密な推理がつねに真相に到達するわけではない」という趣旨の作品を数多く手掛けてきた。

新保博久は、小栗の「震災の年か、もしくは、その前年」に「日本人の書いた探偵小説」を読み、「こんなものなら、吾輩でも書ける」と思ったという発言は、「明らかに乱歩の「二銭銅貨」に對するものだとして、彼への対抗心を指摘しているが、小栗が描く〈探偵〉もまた、その本来の機能にそぐわない性質が付与されることが多いのだから、あるいはその対抗心も、乱歩が〈探偵〉

相対化の先達者であったが故に生じたものなのかもしれない。

初期の小栗作品において、「探偵」という存在は繰り返す、執拗と言えるほどまでに相対化され続けてきた。例えば、小栗虫太郎名義でのデビュー作「完全犯罪」では、探偵ザロフはついに事件を解明し得ず、真相は犯人であるローレル夫人の「完全犯罪報告書」¹⁵によって明かされているし、「或る検事の遺書」(「探偵趣味」一九二七年一〇月)は、「完全犯罪」発表以前に、織田清七名義で発表された作であるが、ここでの探偵は、一度殺人事件の犯人を指名した後に、その犯行時には、実は探偵自身の過失によって、被害者は既に死亡していたという真相にたどり着き、自殺してしまう。

また、「或る検事の遺書」と同時期に書かれたという『紅殻駱駝の秘密』(春秋社・一九三六年二月)、『魔童子』(黒白書房・一九三六年四月)を見てみると、『魔童子』では、探偵にあたる伊能博士が、自らの「絵空事を信じて」狂気に陥った老人に対して「深い責任感に打たれ」、「幸福な瞬間」の内に老人を「衝撃死」させたことを告白するし、『紅殻駱駝の秘密』には、「シャーロット・ホームズ」が処刑されるといって「モチリ劇」が挟まれている。ところが、そのような「探偵」の相対化から一転して、「完全犯罪」から三か月後に『新青年』において発表された「後光殺人事件」で描かれたのは、正統派な探偵の成功譚であった。同作は、当時「前捜査局長で目下一流の刑事弁護士であった」法水麟太郎が、普賢山劫楽寺の住職、鴻巣胎龍殺しの事件を解決する物語である。胎龍殺害の犯人である厨川朔郎は、不在証明を時計のトリックにより偽造するのだが、その過程で「弛み切れ」た蓄音器の

「弾条を捲いて置くのを忘れ」てしまう。法水はこの手抜きを糸口に厨川の不在証明が「故意に自分の口から出さず他人に云はせて」、「極めて自然な様に見せかけ」たものであることを見抜き、事件を解決する。

続く、「聖アレキセイ寺院の惨劇」は聖堂での殺人事件、堂守ラゼレフの養女ジナイダによる養父殺害の顛末を語ったものである。詳しい分析は後に譲るが、本章で問題としたのは、法水が、「自分のみた修道院」は「トラピスト派」だというジナイダの発言は偽りであり、「真実はカルメル教会派」であると看破する場面である。法水は、ジナイダに対し、「自分の心霊を一つの花園と考へ、そこに主が歩み給ふと想像すること楽しからずや」といって、彼女を犯人に擬す「一つの脅迫的な比喻」を使い、彼女を戦かせるのだが、しかし、法水は、この戦きを「自分が犯人に擬せられたのを悟つたからではな」く、その文章が「カルメル派の創始者聖テレザの言葉だつたから」だと分析する。そして「唯一人虚偽の陳述をしたと云ふ点だけでも、あの女が一番犯人に近いと云へるね」と早くに犯人の目星をつけているのである。このように、法水シリーズは「後光殺人事件」より始まるのだが、初期の法水は該博な知識と的確な心理分析で事件を解決する、謂わば典型的な〈名探偵〉であった。しかし、法水が〈名探偵〉であったのは「聖アレキセイ寺院の惨劇」までで、次作「夢殿殺人事件」(『改造』一九三四年一月)以降、彼は〈間違える探偵〉——最後には正解するものの、物語の途中で犯人を指摘し、外してしまうというような——へと変貌を遂げてしまう。

シリーズ三作目に当たる「夢殿殺人事件」は、神秘教団内にあ

る密室の夢殿で、奇蹟行者推摩居士と、尼僧淨善の二名が、それぞれ階下階上において他殺体で発見されるという密室殺人を扱っている。殺人に際し、法水は「推摩居士の行衣にある瓢箪形の血痕を、各人各様に見た印象」を素因に心理試験を行い、ただ一人、知らないと答えた普光尼に対し、それは自分の使ったトリックを連想したためだと述べるも、この推理は外れていた。

四作目の「失楽園殺人事件」(『週刊朝日』一九三四年三月)は離島に建設された癩療養所での事件を取扱った作で、ここでは特に誤謬は見られないが、五作目の『黒死館殺人事件』で、遂に法水は迷走の極点を迎えることとなる。

『黒死館殺人事件』は、「豪壮を極めたケルト・ルネサンス式の城館」での連続殺人事件の解決までの顛末が語られる、シリーズ初の長編小説であった。ここで法水は「不在証明、採証、検出——もうそんなものは、維納第四学派以後の捜査法では意味はない。心理分析だ」というように、心理分析の重要性を高らかに宣言するのだが、その心理分析による推理は、実は間違つたものであった。法水は無実のクリヴォフ夫人を二度も犯人として指名し「捜査史上空前」の「大壮観」たる「歴史的退軍」を喫する羽目になるのである。

以上、駆け足になったが『黒死館殺人事件』までの小栗作品を確認してきた。それら多くの作品に通底するのは〈探偵の敗北〉という主題であり、その文脈から見れば、法水シリーズの一、二作目において構築された正統派な〈名探偵〉像も、後に訪れる〈敗北〉を際立たせる作用を果たしていると言える。連作という形態における〈探偵〉相対化は必然的にその規模を大きくし、か

くして『黒死館殺人事件』までの〈名探偵〉の偶像が作り上げられ、破壊されると解釈できる一連の物語が生まれたのである。

三 〈聖アレキセイ寺院〉と〈黒死館〉との関係性

『黒死館殺人事件』までの法水シリーズを、〈名探偵〉という偶像の創造から破壊までの物語であると把握したならば、その流れの境目に当たる「聖アレキセイ寺院の惨劇」という作品は注目値する。特に「聖アレキセイ寺院の惨劇」と『黒死館殺人事件』との間には強い関係性が存在するため、本章と次章の二章にかけて両者を比較検討し、その関係性を明らかにしていきたい。

分析に入る前に、まずは「聖アレキセイ寺院の惨劇」の梗概をまとめておこう。前日からの震も止んだ明け方五時に、突如聖アレキセイ寺院から、時刻外れの鐘の音が響き渡る。その音を聞いた支倉検事は、定時以外の鐘に異変を感じて、法水と共に寺院へと赴く。正門近くで法水は、偽の電報に釣り出されたという侏儒の軽業芸人ルキーンと出くわす。一行は寺院内にて喉を裂かれたラザレフの死体を発見し、凶器が付近にないことから他殺と判断する。警察が呼び寄せられ、事件の調査が開始される。死後の経過時間は二時間半程度で、即死ではないと思われるにもかかわらず、現場に格闘の痕跡はなく、被害者が動いた様子もなかった。凶器は紙鳶とともに現場から離れた場所で発見され、法水ら三人以外の足跡は見当たらないという。法水は寺院にラザレフと共に住んでいたイリヤ、ジナイダ姉妹への訊問を開始する。そこで、寺院の鐘が奇妙な鳴り方をしたという事実が明かされる。尋問後、

法水はジナイダの証言の虚偽を暴き、姉妹のいる部屋に対して外側から掛けられていたという鍵のトリックを説明する。ところが、鐘の鳴り方がまだ謎である以上、事件は未だ解決しない。法水は結論を保留する。そのような法水に対して、捜査局長熊城支倉が自身の推理を述べるも、法水はそれらを否定する。その後、法水は人を遠ざけて一人鐘楼にて鐘の音の謎に取り組むも、実験は成功しない。ところが法水が寺院を去った夜中に、奇妙な鐘の音は再現され、ついに事件は説明される。犯人はジナイダであったが、彼女は刑務所よりも精神病院に収容されるべきだと考えた法水は、姉妹以外には真相を秘匿し、ジナイダを病院へと送る。

さて、前述のようにこれから二章にわけて「聖アレキセイ寺院の惨劇」と『黒死館殺人事件』を比較検討していくのだが、本章では両者の関係を確認する足掛かりとして、まずは、〈黒死館〉が〈建築〉されるに当たり、繰り返し〈聖アレキセイ寺院〉が参照されている事実を確認したい。

横井司は、『黒死館殺人事件』冒頭の、

聖^{セシ}アレキセイ寺院の殺人事件に法水が解決を公表しなかつたので、そろそろ迷宮入りの噂が立ち始めた十日目のこと、その日から捜査関係の主脳部は、ラザレフ殺害者の追求を放棄しなければならなくなつた。

という記述と「第一章でテレーズ人形のある部屋の密室トリックを解くさい」の、「彼が一句日ほど以前、聖アレキセイ寺院のジナイダの室において贏ち得たところの成功」という記述を引

き合いに出し、「聖アレキセイ寺院の惨劇」と『黒死館殺人事件』の関係性について言及している。だが、二作の関係を示す記述は、これだけには留まらない。「聖アレキセイ寺院の惨劇」ではラザレフは喉を「洋式短剣」で突かれて絶命していたのだが、『黒死館殺人事件』で同じく喉を貫かれた川那部易介の死体を発見した際に、法水は「正にラザレフ（聖アレキセイ寺院の死者）の再現ぢやないか」と「呻くやうな声を出し」ているのである。

そして、これら以上に重要だと思われるのは、両作共に、最大の謎として語られるのが、不可思議な鐘の音だという点である。

「聖アレキセイ寺院の惨劇」では、「綱を引くと最初に小鐘が鳴り、続いて大鐘」が鳴るはずの寺院の鐘が、事件時には「最初にゴーンゴーンと大鐘が鳴り出して、それから小鐘が始ま」という、「顛倒した鳴り方を」してみせるのであるが、法水は、この「鳴鐘の機械装置」上有り得べからざる「鐘声の地位を主役に」して、ラザレフ殺しに取り組んでいく。

一方、『黒死館殺人事件』では「鐘^{カネ}鳴器^{ネリ}の理論上」、「絶対に不可能」なはずの倍音が発せられるのであるが、これに対して、「聖アレキセイ寺院の惨劇」での現象が引き合いに出されている。

聖アレキセイ寺院の鐘声にも、これとよく似た妖怪的な現象が現はれた事があつた。けれども、それは単なる機械学的な問題で、つまり振り鐘の順序に過ぎなかつたのである。所が、今度はそれと異つて、第一に三十余りの音階を決定してある——換言すれば、物質構成の大法則であるところの鐘の質量に、抑々根本の疑惑がこもつてあるのだ。

「過ぎなかつた」という表現が端的に示すように、『黒死館殺人事件』の「幽霊的な倍音」は「聖アレクセイ寺院の惨劇」での鐘声以上の謎であると語られ、法水は「黒死館事件最大の神秘」とすら称されるこの倍音の機構解明に呻吟することになるのである。

以上の記述から明らかなように、『黒死館殺人事件』は探偵の台詞や語りの文という異なる位相から、繰り返し「聖アレクセイ寺院の惨劇」を参照し続けている。この理由の一つには、「聖アレクセイ寺院の惨劇」から『黒死館殺人事件』までの間には、「夢殿殺人事件」と「失楽園殺人事件」の二作が書かれているが、これらはそれぞれ『改造』、『週刊朝日』に掲載されており、従って『新青年』に掲載された作品としては「聖アレクセイ寺院の惨劇」が直近の作品に当たるため、これに言及することで読者の記憶を喚起しようという狙いがあったであろうことは想像に難くない。しかし、両者の関係は決してそれだけのものではないことが、法水の〈推理〉という観点からこれらを見比べた時に発覚するのである。

四 〈聖アレクセイ寺院〉と〈黒死館〉との対照性

シリーズ連作において、最新作は前作を越えるものだと宣伝し、読者の興味を煽ろうとするのは極めて実用的な手法だと思われるが、『黒死館殺人事件』にとつて、「聖アレクセイ寺院の惨劇」はそのように単純な、乗り越えるべき過去の作品というだけではな

かつたように思われる。結論から言えば、法水の〈推理〉という点で『黒死館殺人事件』と「聖アレクセイ寺院の惨劇」は、非常に対照的な構造を有しているのである。

この対照性が最も分り易くあらわれているのは、本稿の二章でも確認したところの、心理分析による推理の〈正解／不正解〉である。既に指摘したように、「聖アレクセイ寺院の惨劇」で、法水は自身が放った「脅迫的な比喩」に対するジナイダの反応から彼女の心理を分析、「トラピスト派だ」という発言を偽りであると看破し、「とにかく、唯一人虚偽の陳述をしたと云ふ点だけでなく、あの女が一番犯人に近いと云へる」と述べている。

一方、『黒死館殺人事件』では、法水は詩句による心理分析から、ダンネベルグ殺害事件当夜におけるクリヴォフの行動を推理し、さらに、彼女の証言を詩集中の表現から連想された「一場の架空談」だと述べ、彼女が犯人であると指摘している。

このように法水は、「聖アレクセイ寺院の惨劇」では、心理分析によつて早期に犯人に目星をつけ、濃厚な嫌疑をかけたつも、鐘がいかにかして鳴ったかという現象に物理的な説明がつけられないために結論を保留していたのに対し、『黒死館殺人事件』では「倍音演奏が、何故に起されたもの」なのか未だ説明できていない状況であるにもかかわらず犯人の指摘に踏み切っている。前者においては心理分析と現象に対する物理的説明は、補完的な関係にあったが、後者では法水の宣言通り、心理分析はほとんど単独で犯人を決定し得るものとして前景化され、しかしその結果、法水は「歴史的退軍」を強いられるのである。

また、探偵小説においては、〈探偵〉と〈ワトスン役⁽⁵⁾〉の見解

が相違するというのはよくある趣向であり、「聖アレキセイ寺院の惨劇」と『黒死館殺人事件』においても、そのような趣向は確認できるのだが、その扱ひ方に関しても対照性は存在している。まずは、「聖アレキセイ寺院の惨劇」において、見解の相違が表出する、法水、支倉、熊城らによる推理合戦とでもいうべき場面を確認したい。

イリヤ、ジナイイダへの訊問後、法水はジナイイダへの嫌疑を濃くし、鍵のトリックを説明してみせるが、「鐘声があるので、この思ひ付きだけで事件を終らせてしまふ訳には往かない」という。法水の逡巡に対して、熊城は「犯人の目星が付きさう」だと述べ、自身の推理であるルキーン犯人説を披露する。熊城によれば、「構内に足跡がない」以上、「犯人は雲の降り止んだ二時頃には既に堂内において、兇行を終へてから、地上に踵を触れず遁れ去つたと観察するより外にな」く、犯人は鐘の「振綱に攀じ登つてから塔の窓に出て、そこで兇器を裏門の方へ投捨て、から、架空線架空線を伝はつて円蓋を下り、そして回転窓の下に引き込まれてゐる、動力線に吊り下つて、スル／＼猿みたいに構外へ出」たのだという。そして、それを可能にするのは「人並優れた腕力とそれに反比例する小児程度の体重」であり、その「至極難条件」を満たしているというのがルキーンだというのである。それを聞いた支倉は、「鐘の機械装置を忘れて」いると非難するも、熊城は鐘の音の不思議は「潤色的な出来事」で事件の本質とはかわりないと排除してしまう。

対して検事は、他殺では「格闘の形跡がないし、苦悶に引ん歪んだ顔や指先をしてゐても、のた打ち廻つたり逃れようとして床

を掻き捲つた跡もなければ、傷口を押えた形跡も見られない」点到説明がつかないとし、「ラザレフの死に自殺説を主張する」。支倉によれば、凶器は「後から抜き取られた」ものであり、熊城は「その抜き取つた人物を指して、犯人だと云つてるんだ」という。その後も支倉と熊城は意見を戦わせるのだが、その中で意見を求められた法水は、自分の意見は「たゞ鐘声の地位を主役に進めるだけのもの」だと述べ、続けて「マア我慢して貰つて君達の推論を訂正する労だけでも、買つて貰ふ事にしよう」というように二人の推理に対する反論を開始する。

手始めに法水は、支倉の自殺説を、「それが謬論だと云ふ事は、死体の最後の呼吸が証明してゐる」といつて否定する。ラザレフの「胸隔を見ると、それが吐息の直後になつてゐる」のだが、「マインルト等の説」によれば、「末端動脈が烈しく緊縮して胸部に圧迫感が起るので、呼吸を肺臓一杯に満たして不安定な感覚を除いてからでない」と、意志を実行に移すこと」は「不可能」であり、従つてラザレフの死は自身の意志によるものではないと法水は断じるのである。

さらに、熊城説では、被害者の動いた形跡がないのは、ラザレフに「中風性麻痺」が起つたせいだと説明をつけていたのだが、この点に関して、「麻痺の起つた部分は屍冷に等しい程冷たくなつてゐなければならぬのに」、その様な温度差は感ぜられなかつたと反論を加えている。また、法水は死体の股下にあつた手燭を問題にして、残蠟の状態から蠟燭は火をつけられてから「その燼燃え終つた」はずだと述べる。しかし、ラザレフの「着衣には焼痕が残」されていないので、「ラザレフの死体は直立し

てゐるが、その届かない位置にあ」つたと考えられ、「当然そこに詭計が必要」とされたのだという。「それは一本の丈夫な紐」を使つたトリックで、法水は、そのようなやり方が必要とされるのは熊城の述べる条件とは反対の、「普通人の体軀を備えていて、非力なために尋常な手段では殺害の目的を遂げることの出来ない人物」だと結論付けるのである。

一方、『黒死館殺人事件』では、見解の相違が表出する箇所は複数にわたる。複数の事件で「完全に情況証拠の網の中にあ」つた犯人紙谷伸子に対して、支倉、熊城らは早期から疑いのまなごしを注いでいるが、法水はその見解を否定し続けている。クリヴォフ狙撃後の訊問では、伸子は熊城の手によつていよいよ逮捕されそうになるのだが、法水はこれを阻止してしまう。その後再びクリヴォフが襲撃され殺害されると、当然のことながら彼女への疑惑は益々濃くなるのだが、しかし、それでも法水は「あんな賤民の娘が、どうして、この宮廷陰謀の立役者なもんか」と熊城らの意見を聞き入れない。結局、法水が真相を述べるのは、彼女が自殺をした後のことになるのである。

かように、「聖アレキセイ寺院の惨劇」と『黒死館殺人事件』の両作において、法水は熊城、支倉の推理を否定しているのだが、前者では法水が正しかったのに対し、後者ではむしろ二人の方が真相を射抜いていた。このような〈探偵〉と〈ワトスン役〉の対立における〈探偵〉側の主張の正否に加え、先に指摘したような心理分析後の犯人指摘の〈保留／決定〉とその結果の〈正解／不正解〉の問題を合わせて考えれば、法水の〈推理〉という観点において、両作には明らかな対照性が見出せるのである。

五 〈伏線〉としての逸脱

これまでの章では「聖アレキセイ寺院の惨劇」が法水シリーズにおける転換点ともいふべき作品であり、同作は『黒死館殺人事件』において繰り返し参照され、なおかつ両者は〈推理〉という観点において対照的であることを論証してきた。本章ではさらに「聖アレキセイ寺院の惨劇」の結末部を分析することで、同作の新たな解釈を提示したい。

「つまり、この事件の生因に、僕独自の解釈を施した結論なのでして、犯人に対する刑の執行が、刑務所より精神病院の方が適はしいと考へたからです。真相が僕一人だけの秘密だとすれば、当然僕に裁く権利がある筈ですからね」

法水は事件の真相を姉妹以外には秘匿し、「催眠剤」によつて眠らせたジナイターを「癡狂院」へと送ってしまう。このような、〈探偵〉が犯人に対して私的な裁きを下すという趣向を持った作例は数多く存在している。例えば、ドイルの「アビー荘園」（一九〇四年）や「悪魔の足」（一九一〇年）などの事件に見られるように、ホームズは度々犯人を見逃しているし、それとは逆に、ヴァン・ダインのファイロ・ヴァンスなどは、「僧正殺人事件」（一九二九年）に見られるように、自ら犯人を葬ってしまった。

「語学に対するカンだけが恵まれてゐた」という小栗は、学生時代にコナン・ドイルを読んでいるし、「海外探偵小説十傑」（新

青年』新春増刊号・一九三七年二月五日)という企画では『僧正殺人事件』を二位にランクさせているのだから、このような〈探偵〉のふるまいについては当然認知していたと思われる。従つて〈名探偵〉の成功譚たる「聖アレクセイ寺院の惨劇」に、このような結末が与えられた事實は、一見、取り立てて問題にするような事柄でもないように思われるわけだが、『黒死館殺人事件』冒頭において、事件の「迷宮入り」がわざわざほめかされている以上、その機能については一考を要する。

「聖アレクセイ寺院の惨劇」冒頭で、法水は「捜査当局が散々持て余した末に登場するのが常」だと説明されているが、それは無論「捜査当局」では手に負えない事件の〈解決〉が望まれてのことであるはずだ。ところが法水は真相を公表せず、事件は「迷宮入り」するのであるから、それを読書行為によって知り得た読者にとってはそうでなくとも、秘匿された作中人物たる支倉、熊城らにとつて、法水は最早〈名探偵〉ではなくなつてしまつてゐるのである。

つまり、『黒死館殺人事件』冒頭の「迷宮入り」という記述は、「聖アレクセイ寺院の惨劇」の結末部において、犯人に私的な裁きを下すという謂わばありふれた〈探偵〉のふるまいにより、法水が実は、〈名探偵〉から逸脱していたことを明かすものとして機能していると言えよう。そしてまた、これは同時に、第四章で指摘した対照性が結末にもあらわれることを示す記述でもある。

『黒死館殺人事件』では誤謬によつて迷走をしつつも、最終的には事件は解決、大団円を迎えるのに対し、「聖アレクセイ寺院の寺院」では名推理が語られるも、解決が公表されず、事件は「迷

宮入り」してしまふのだから。

このような「黒死館殺人事件」での〈種明かし〉を際立たせるのは、「聖アレクセイ寺院の惨劇」における〈伏線〉の存在である。

推理合戦の後、法水は一人、鐘の音についての実験を続けるのだが、「遂に期待した一鳴りを聴く事が出来」ず、夕方には寺院を去つてしまふ。ところが、その夜中に、寺院の鐘が「始めにゴーンと大鐘が鳴り出し」す例の鳴り方をし、「聖堂の神秘と恐怖が再び夜空を横切つて訪れて来」る。夜が明けて、イリヤが法水の元を訪れるのだが、彼女に対して法水は、昨夜の鐘は自身が鳴らしたものであり、「それで、ラザレフ事件は解決され」たのだと告げる。犯人はジナイダだったのだが、さらに法水は昨日の夕方の去り際、既に彼女に対して毒薬のラベリングがされた催眠剤を忍ばせていたことをも告白する。

以上は推理合戦以後の流れを要約したものであるが、これらの出来事を物語内の時間軸に沿つて整理すると、法水は実験によつて実証が得られる前にジナイダに対して行動をとつていたという事実が判明する。すると注目されるのは実験の夜の法水の態度である。「法水は何時になつても、寝ようとはせず、眼に耳に神経を集めて、何物かを見、或は聴き取らんとするかの如くであり、鐘が鳴つた後、ようやく「ニツと微笑んで、それから昏々と睡り始めた」というのである。

ここからは法水の実験の正否に対する不安が窺われるわけであるが、してみると、ジナイダへの行為は、無論自分の理論に自信はあつたに違いないが、確証はない状態で起こされたもので

あつたということになる。ここには、端的に法水の探偵法の危うさがあらわれていると言える。そして、実際にここで示された危うさは『黒死館殺人事件』において大いなる誤謬を引き起こした要因となつてあらわれてくるのである。

心理分析によつてクリヴォフを犯人に指摘した後、法水は熊城から「理論はよく判つた」が、「各々の犯罪現象に、君の闡明を要求したい」と言われ、「鐘鳴器室の頭上に開いてゐる十二宮の円華窓」に秘められた暗号を解読してみせる。得られた解答は「大階段の裏」であり、法水は、そこに「隠扉、坑道」があるに違いないと調べる前から決めつけてしまう。ところが実際のところ、後ほど明らかになるように「大階段の裏」には「隠し扉^{ドア}も秘密階段も揚蓋もな」く、一冊の本があるだけであつた。このように、法水の「歴史的退軍」は心理分析によるものであると同時に、実証を得るのを怠つたために引き起こされたことでもあつた。ここでは、前章において指摘した〈心理／物理〉の〈前景／後景〉化がまずは確認できるわけだが、先に述べた危うさ——その物理的な解明も、検証がされたわけではない、実証を得たわけではないという点で、差し当たつての理論であり、端的に言えば〈仮説〉の段階にとどまるものでしかない——の顕在化もまた確認できる。

「聖アレクセイ寺院の惨劇」において法水に失敗はなく、またこの危うさに関しても特には言及がないので、同作は正統派な〈名探偵〉の成功譚という体裁を保っている。しかし、以上確認してきたように、ここでは法水が〈名探偵〉から逸脱していくことが密かに——だが確かに、宣言されている。そして、ここで示

された逸脱は、『黒死館殺人事件』における迷走へと直結するのである。

以上の分析により、小栗のキャリア初期における「後光殺人事件」から『黒死館殺人事件』までの大きな流れと、その中で「聖アレクセイ寺院の惨劇」が果たした役割について、新たな解釈を提出し得た。

初期の小栗作品では、「完全犯罪」においては〈探偵の誤謬〉、「或る検事の遺書」においては〈探偵Ⅱ犯人〉や〈探偵の死〉というように、様々な〈探偵〉の相対化が確認できる。そして、『黒死館殺人事件』までの法水シリーズは、それらの中でも〈探偵の誤謬〉を焦点化し、複数作にわたつて法水が〈名探偵〉から〈迷探偵〉へと段階的に移行する様子を描いたという点で、それ以前の小栗作品における相対化の発展形であると捉えることができる⁽²⁾だろう。

そのような壮大な〈物語〉の中、「聖アレクセイ寺院の惨劇」でなされた密やかなる逸脱への宣言は、『黒死館殺人事件』において「歴史的退軍」として回収されるべく用意された、大いなる〈伏線〉として機能しているのである。

注

(1) 「新青年」(一九三四年四月～二月)に連載され、翌年五月に新潮社から刊行された。

(2) 松山俊太郎「解説」(『潜水艇「鷹の城」』社会思想社・一九七七年二月)

(3) ただし松山は、昭和一〇年から一一年あたりの作品に対しては、「おおむね「実験的」でかけ替えのない個性をもつ」というような評価を下している。

(4) 横井司「小栗虫太郎試論——「完全犯罪」を中心に——」『文研論集』一九九一年三月

(5) 杉江松恋「解説」『失楽園殺人事件』扶桑社・二〇〇〇年二月

(6) 江戸川乱歩「鬼の言葉」『ぶろふいる』一九三五年一月

(7) Stefano Tani「THE DOOMED DETECTIVE」(一九八四年) 引用はステファノ・ターニ／高山宏訳『やぶれるる探偵』東京図書・一九九〇年七月

(8) 注(7)に同じ。

(9) それぞれ初出を確認すると、「二銭銅貨」の末尾には「一一〇。二」、「一枚の切符」には「一一、九、二五、」と記載されている。

(10) 横井司「陰獣」論——江戸川乱歩における〈推理〉(『国文学』一九九一年三月)。また、大倉由香は「江戸川乱歩『陰獣』論—反転する『推理』をめぐる—」(『近代文学注釈と批評』一九九七年三月)において「陰獣」以前の類似的趣向を持った乱歩作品をまとめあげている。

(11) 「紅殻駱駝の秘密」を書いたあの頃の思ひ出(『紅殻駱駝の秘密』春秋社・一九三六年二月)

(12) 新保博久「解題・解説」(江戸川乱歩「謎と魔法の物語—自作に関する解説」河出書房・一九九五年六月)。確かに、「紅殻駱駝の秘密」を書いたあの頃の思ひ出に記された、関東大震災の年である一九二三年周辺で「新趣味」(略)或は「新青年」に作品を掲載した「現存〇〇〇〇〇氏」というのは江戸川乱歩である可能性が極めて高い。また、新保が続けて紹介す

る、小栗が死の直前に乱歩を訪ね、「結局はくはあなたにかなわなかったですよ」と語ったという『探偵小説四十年』に出てくるエピソードは、かつて抱いていた乱歩への対抗意識を告白した場面に他ならない。

(13) 引用は『白蟻』(ぶろふいる社・一九三五年五月)に拠る。

(14) 小栗宣治は「小伝・小栗虫太郎」(『紅殻駱駝の秘密』桃源社・一九七〇年五月)において、小栗が「大正十一年九月に『四海堂印刷所』を設立し」てから、「大正十五年に畳むまでの四年間に」上記三作と「源内焼六術和尚」(『ぶろふいる』一九三六年一月)を書いたことを証言している。

(15) 引用は「完全犯罪」(桃源社・一九六九年九月)に拠る。

(16) 厳密には脚本の作者たる犯人からの嘲弄であって、〈探偵〉の相対化とは多少趣が異なるものの、「シャーロック・ホームズ」の「死刑」⇨〈名探偵〉の〈死〉というのは、小栗作品に幾度となく象徴的に表れる問題である。

(17) 注(13)に同じ。

(18) 注(13)に同じ。

(19) 引用は「黒死館殺人事件」(新潮社・一九三五年五月)に拠る。

(20) ことさらに心理分析の重要性が主張されるのは「黒死館殺人事件」が初めてであるが、今まで確認して来た法水の推理から明らかのように、同様の手法は何もこの作品特有のものではない。不在証明を偽造したものの心理を推察したり、発言に対する反応から相手の心理を推し量るやり方は、無論、心理分析の範疇にあると言える。

(21) 「黒死館殺人事件」における法水の誤謬、「探偵」の相対化の問題については拙稿「諧謔と風刺の館——小栗虫太郎『黒死館殺人事件』論」(『立教大学日本文学』二〇一四年一月)を参

照のこと。

(22) 注(20)で述べたように、『黒死館殺人事件』以前からも法水は心理分析の手法を多用している。従って『黒死館殺人事件』までの法水シリーズは同手法の不正確さを批判する物語でもあ
る。

(23) 横井司「語る／語られるものとしての推理」〔『現点』八号・一九八八年〕

(24) 鍵のトリック説明のこと。法水は、ジナイエダが室内にいな
がら部屋の外から施錠したという不可能状況を、「糸で鍵を操
る術」によって解決してみせている。

(25) 探偵の引き立て役として配置される人物のこと。コナン・ド
イルのシャーロック・ホームズシリーズに登場するワトスン博
士はその代名詞的な人物である。

(26) 注(11)に同じ。

(27) 本稿においては射程の都合上、一面的にしか言及できなかつ
た乱歩における〈探偵〉相対化と小栗におけるそれとの比較に
関しては、今後の研究課題としたい。

※「聖アレクセイ寺院の惨劇」本文の引用は、『白蟻』（ぶろふいる
社・一九三五年五月）に拠る。他の文献も含め、引用に当たって
漢字は全て新字体に改め、傍点等は省略し、ルビは必要と思われ
るもののみ振った。

（まつだしょうへい 大学院博士後期課程在學生）